

人と交わり、外界とつながる コミュニケーション理論と実践の創造を

荒木 穂積

あらかし ほづみ
立命館大学産業社会学部
本誌編集委員

子育てや保育・教育は、人が人を育てる活動であり、家庭や保育園・幼稚園、学校はそれを営む場所である。人間は「ヒト（生物的）に生まれ人（人間的）になっていく」といわれるように、誕生した赤ちゃんは人や人々との「交わり」（交流）によって、外界とつながり、存在する世界を学びとってゆく。子どもは人や人々との「交わり」（交流）をとおして人格を形成する。このような人や人々との「交わり」やそこでの時間・空間の共有化の活動を、人間発達におけるコミュニケーション活動とよぶ。

最近、教育や福祉の分野では発達支援や教育支援ということばがよく聞かれるが、人間発達における発達支援や教育支援活動では、支援を受ける人と支援をする人との「交わり」（交流）によってお互いが影響を受け合いお互いの人間性や人格を高めあう機会や関係が弱まってはならないであろう。支援はつまるところ相手が求めているサービスの提供であるとする意見もあるが、人や人々との「交わり」を本質とするコミュニケーション活動を媒介とする発達支援においては、支援を受ける人と支援をする人は「主従関係」ではなく「対等・平等な関係」でなくてはならないだろう。コミュニケーション活動の重要な本質の一つはこの点にある。

障害児教育の分野では、コミュニケーションのスキルを高める方法の一つとして、環境の調整やコミュニケーション・ツールの使用が重要になるが、それは外界をよりわかりやすく認識できるようにするという目的と同時に、人や

人々との「交わり」（交流）を豊かにするという目的を同時に追及し保障するものでなければならぬであろう。外界への認識の高まりをうながす環境設定ばかりに目を奪われてしまって子どもの孤立化をうながしたり、集団を解体してしまって疎外化をうながしたりしては、「本末転倒」となる。コミュニケーション活動をうながすスキルは、豊かな人間関係や人格発達と結びついた発達保障をめざすスキルとして開発されなければならないだろう。コミュニケーション・スキルの開発にあたってはコミュニケーション活動の本質は何かという点にたえず立ち戻った理論的検証が求められる。

本特集では、発達を保障するコミュニケーション活動をどのように展開してゆくかについて理論と実践の両方から論じてもらうことを意図した。企画にあたっては、特定の障害を念頭においては無いが、重度のコミュニケーション障害をもつ子どもも軽度のコミュニケーション障害をもつ子どもともに念頭においている。また、個別のコミュニケーション指導の方法については本特集ではとりあげていないが、人間発達の視点から、発達段階や発達の質的転換期を明示してコミュニケーション活動の特徴や指導方法の諸問題をとりあげてもらった。

人や人々と交わり、外界とつながるコミュニケーション活動の保障によって、どのように主体形成がすすみ人格発達がうながされるか、さらなる人間発達のすじみちの解明とそれを支える技術開発や実践展開が求められている。